

ミステリー小説で見るスウェーデンの福祉

ばおぼぶ代表 五十嵐正人

第3回 カーリン・アルヴテゲン 社会福祉と新自由主義

これまでの二回で、現代スウェーデンの社会福祉の優れている点、課題の見られる点を、日本のそれと比較しながら読み取ってきた。その中には貧困問題や、経済格差などスウェーデンほどではないにしても、日本でも大きくなりつつある課題がみられた。また移民問題にしても日本において未来永劫、無縁な課題だとはいえまいだろう。こうした社会福祉を困難にする問題について、さらに深く掘り下げてみたい。

今回取り上げるのはカーリン・アルヴテゲン。1965年生まれ的女性作家だ。彼女の代表作の一つ『喪失』(柳沢由実子訳 小学館文庫)から引用する。主人公シビラ・フォーセンストルムはホームレスとして生きている女性である。

おとなしくしているなら、税金から少しだけお恵みをあげよう。少しだけだぞ、餓死しない程度にだ。われわれは化け物じゃない。実際われわれは毎月あんたたちのような人間がお恵みをもらえるように税金を払っているんだ。だから地下鉄の駅でわれわれの前に手を出してもっとほしいと言うのはやめてくれ。あれはじつに不愉快だ。われわれはあんたたちに迷惑をかけないのだから、あんたたちも迷惑をかけないでくれ。文句があるのなら、仕事をすればいいじゃないか。しっかりしろ。住むところがほしいだと？ われわれがなにもしないで住宅を手に入れたとでも思っているのか？ それが問題なのなら、どこかにあんたたちのような者たちが暮らせるホームを建てればいい。われわれの住んでいる地域に？ とんでもない。子どものことも考えなければ。泥棒や麻薬中毒者や、ゴミをやたらにあたりにまき散らす者たちをわれわれの住むところに入れるわけにはいかない。どこかほかのところならいいが。

もちろんすべてのスウェーデン国民の意識ではなく、ある種の考えに基づく意見である。しかし、一部の意見であったとしても、こうしたプレッシャーにシビラたちホームレスは晒されているというわけだ。

そしてこの考え方こそが、長く欧米を席卷し続けている新自由主義なのだとは僕は考えている。新自由主義の提唱者の一人といえるだろうミルトン・フリードマンの著書『資本主義と自由』から引用する。

自由は、責任ある個人だけが要求できるものである。狂人や子供の自由には正当性があると
は考えない。したがって、責任ある個人とそれ以外との間に線引きをしなければならないが、

この時点ですでに、自由という目標には本質的な曖昧さが潜んでいることがわかる。そして責任をとれないとみなされた人たちについては、政府が否応なく温情的干渉をしてくる。

いちばんわかりやすいのは、狂人の場合だろう。狂人に自由を認めたくはないが、しかし射殺したくない。誰かが自発的に狂人を住ませ世話をしてくれるなら大変ありがたいことであるが、そうした慈善事業的なやり方に頼ることは適切と言えるのだろうか。たとえば私が狂人の世話をすれば他の人が恩恵を受け、そこには測定しにくい外部効果が発生する。この点を考えただけでも、慈善活動に頼るのは不適切と言えよう。こうした理由から、狂人の世話は政府を通じて行うのが望ましいと考えられる。

(『資本主義と自由』ミルトン・フリードマン 村井章子訳 日経B P)

どうだろうか、二つの引用は同じ事を語っているようにみえないだろうか。前者の「文句があるのなら、仕事をすればいいじゃないか。しっかりしろ。住むところがほしいだど？ われわれがなにもしないで住宅を手に入れたとでも思っているのか？」は後者の「自由は、責任ある個人だけが要求できるものである」の具体例の一つとして読むことができるだろう。また前者の「われわれ」と「あんたたち」は後者の「責任ある個人とそれ以外」であり、その両者の間には「線引きをしなければならない」という共通の意識があると思われる。さらに「おとなしくしているなら、税金から少しだけお恵みをあげよう。少しだけだぞ、餓死しない程度にだ。われわれは化け物じゃない」という言い訳は、「狂人に自由を認めたくはないが、しかし射殺したくない」という温情の裏返しに聞こえる。「どこかにあんたたちのような者たちが暮らせるホームを建てればいい。われわれの住んでいる地域に？ とんでもない。子どものことも考えなければ。泥棒や麻薬中毒者や、ゴミをやたらにあたりにまき散らす者たちをわれわれの住むところに入れるわけにはいかない。どこかほかのところならいいが」という考えは、後者の「こうした理由から、狂人の世話は政府を通じて行うのが望ましいと考えられる」という発想に行き着くだろう。これが新自由主義下での社会福祉の正体だといえるのではないか。主人公のシビラは、こうした視線に晒されながらホームレスとして生きているのだ。

さて、ここでいったんミステリー小説から離れて、スウェーデンにおける新自由主義の歴史をみておくことにする。

新自由主義に繋がる思想はそれ以前からあったが、象徴的な実践はイギリスにおけるサッチャー政権とアメリカのレーガン政権の施策であろう。1979年に就任したサッチャー首相は、小さな政府を目指して民営化を推し進める大改革をおこなった。福祉分野においてもそれは顕著で、1961年生まれの子どもの頃に学んだ「ゆりかごから墓場まで」というイギリスの高福祉は姿を消した。それほどまでに1970年代に欧米を襲った経済の低迷は激しかったのである。同様に1981年に就任したレーガン大統領は、さまざまな権限を州に委譲してアメリカ合衆国政府を小さな政府にする施策を行なった。

この二つの国と比べると、スウェーデンでの新自由主義の台頭は遅かった。英米が経済に苦しんでいた1980年代、スウェーデンはバブルといってもいいような経済状況だった。そして新自由主義の象徴的施策のはじまりは1991年総選挙で中道右派連合政権が樹立されてから。1990年代になって、スウェーデンは経済危機に陥ったのだ。そこでスウェーデンもまた省庁再編、民営化、規制緩和などに取り組むこととなった。

と、ここで疑問が出てくる。スウェーデンでは1997年の知的障害者関係施設廃止法によって、1999年12月31日までに特別な病院、入所施設を全廃することが決まったのだが、これは民営化、規制緩和などによる小さな政府、すなわち新自由主義に基づく施策なのだろうか。これらが英米の施策であるなら、そう見ることもできるだろう。しかし経済危機が遅れてきたスウェーデンでは、英米が新自由主義に舵を切った時期にノーマライゼーションを目指していたのだ。そのことから特別な病院、入所施設の解体はノーマライゼーションの一環だということもできる。

ノーマライゼーションの始まりをデンマークの知的障害者福祉法とするなら、それは1959年のことだ。スウェーデンにおいては1968年に知的障害者ケア法が、1982年に社会サービス法が施行され、1986年には知的障害者ケア法が改正され脱施設、地域移行が進むこととなった。英国ではサッチャー首相、米国ではレーガン大統領が在任していた時期にである。このことから私はスウェーデンにおける1990年代以降の脱施設、地域移行の社会福祉施策は、ノーマライゼーションと新自由主義という二つの相容れない思考のせめぎ合いの産物だと考えている。

ノーマライゼーションと新自由主義が相容れないことについては、ことさら説明するまでもないだろう。前者は健常者と障害者など分断されている壁を無くすことを目指している。これに対して新自由主義は「責任ある個人とそれ以外との間に線引きをしなければならない」と主張しているのだから。

あくまでも私的な意見だが、私は新自由主義を信用してはいない。それは持続可能な福祉の実現というような評価をされるが、その持続を可能にする手法が心配なのだ。ミルトン・フリードマンの「狂人に自由を認めたくはないが、しかし射殺したくはない」という心境は、フリードマン独自のものなのだろうか。もしもそれが新自由主義の闇であるのだとしたら、持続可能の担保は「射殺したくはない」がすべてなのだろう。「射殺したくはない」と口にできるのは、射殺することができる者たちだけなのだろうから。

カーリン・アルヴテーゲンのミステリー小説に戻ろう。主人公のシビラは社会福祉の新自由主義的側面に危険を感じている。それは先の『喪失』の引用から明らかだ。しかし、そうかといってノーマライゼーションを認めているようにも思えない。

シビラはある事がきっかけで殺人の容疑者として追われている。そこで逃亡しながら真犯人を捜すのだが、それを手助けする少年が現れて……。ホームレスに憧れているその少年とシビラの会話を引用しよう。

「将来浮浪者になるというのなら、あんたにもその覚悟がなくちゃね」

「食べ物とかそういうものに自治体からお金がもらえるはずだよ」

彼女は答える気もしなかった。そんなことをしたら、ああしろこうしろと命令する人間が必ず出てくると言ってやりたかった。

ノーマライゼーション以前の施設収容ではない、以降の自立支援であってもシビラは拒否している。シビラは新自由主義であってもノーマライゼーションであっても、公的な社会福祉から距離をおこうとしている。どちらであっても近寄りたくないと考えている。あるいは自分に向けら

れる支援を経済的事情からの施策と、福祉的施策にわけて考えているのかもしれない。どちらも嫌だということは同じだが、前者は権利を侵害してくるものであり、後者は自由を奪うものとして分けて理解しているようだ。

スウェーデンにはノーマライゼーションをベースとした高福祉と、新自由主義呼び込む社会、経済状況があって、両者がせめぎ合いながら社会福祉を形成しているのではないか。私はカーリン・アルヴテグンを読んでいてそう感じている。

では、日本の社会福祉は？ 日本はスウェーデン同様、英米よりも遅れて経済の低迷が始まった。そのため施設解体等が始まるのは社会福祉の基礎構造改革以降、障害福祉の制度としては2003年の支援費制度導入からになる。この日本の地域移行がノーマライゼーションによるものなのか、あるいは新自由主義に寄り添ったものなのか。いずれははっきりとするのだろうが、私自身の実感としては新自由主義をベースにしているようにしか思えない。2003年当時の小泉首相は規制緩和と民営化を推し進めていて、明らかに日本は新自由主義の流れの中にあつた。地域移行や、それに伴う地域生活支援やグループホームを使っての地域移行などをノーマライゼーションの一環と評する人たちもいるだろう。しかし実態を見て欲しい。同じ地域に暮らしているとしても、両者の間の壁は無くなってはいないのではないか。あるいは、同じ地域に住んでいるからこそ、健常者と障害者の間には明確な線が引かれているのではないだろうか。だとしたらなら、それは新自由主義の都合による地域移行に他ならない。

日本のようにせめぎ合いのない社会福祉と新自由主義の関係を、新自由主義型社会福祉と呼んでみる。社会福祉がノーマライゼーションもろとも飲み込まれ、新自由主義をベースにして成立している社会福祉だ。おそらく英米のそれも新自由主義型社会福祉なのだろう。かつての高福祉は経済に大きな負荷を掛けたかもしれないが、新自由主義型社会福祉は社会の経済格差を増長させている。いずれ別の社会福祉理論が求められる日が来るだろう。新自由主義の掲げる持続可能が、何を担保にしているのかを忘れてはいけない。そしてシビラがこだわる「自由」に対してももっと私たちは気を配るべきだ。日本では障害者の権利擁護の声をよく聞くが、障害者の自由を奪わないことに関してはあまりにも無関心が過ぎるように思う。社会からは権利を守り、福祉が自由を奪わないこと、この二つを『喪失』は日本の私たちに教えてくれている。

カーリン・アルヴテグンのミステリー小説からは、まだまだ興味深い文章を見つけることができる。解説は簡単にして、さっそく引用していこう。

『満開の栗の木』(柳沢由実子訳 小学館文庫) から。

なにより不可解なのは、アンナ=カーリンは深い考えもなく、またなんの良心の痛みもなく、簡単に言葉を口にする事だった。まるで言葉は自然の力に押し出されるかのように発せられた。たいていの人は自分の偏見が暴かれたら恥ずかしく思う。だが、アンナ=カーリンはちがった。彼女は自分の言っていることが正しいと信じ、ほかの人にそれを批判されるのを拒んだ。ホモセクシャルは病気。イスラム教はテロリスト。黒い髪の間人たちは怠け者で信じるに足りず、スウェーデンの社会福祉を当てにして移住してくる不良外国人。彼らはスウェーデン人が何世代も懸命に働いて築き上げた社会を食い物にする。ローマ人はみんな泥棒。そして、ヴェルネルのような変わり者はみんなの迷惑。すべてが黒か白かあらかじめ彼

女の頭の中で決められているのだ。アンナ＝カーリンの法則に従えば世界はなんの問題もないとばかりに。

この小説は、厳密にはミステリー小説とはいえないかもしれない。しかし『喪失』で書かれたホームレスに対する社会の声の補足として引用することにした。「われわれの住んでいる地域に？とんでもない。子どものことも考えなければ。泥棒や麻薬中毒者や、ゴミをやたらにあたりさまにまき散らす者たちをわれわれの住むところに入れるわけにはいかない」というような主張が、どのように形成されていくのかを表している。

田舎の村でホテルを営む主人公。その隣人がアンナ＝カーリンだ。スウェーデンのミステリー小説に登場するような強烈な犯罪者ではなく、ちょっと困った村人に過ぎない。しかしそんなところから、ヘイトが生まれていく。

「最初はアンナ＝カーリンの言うような嘲笑的な冗談から始まるんだ。それが差別を育ててしまう。笑う人が多ければ多いほど、“われわれ”という仲間意識が強まり、冗談が意見にまで成長したとき、人はいままで笑っていた対象を“彼ら”とみなして距離をおく。自分たちは“われわれ”の側にいる。異なる者たちは外にはじき出される。すべての差別と迫害はそうのように始まるんだ。

“われわれ”が形成される。それは同時に“あんたたち”が作られることだ。そして両者の間に線が引かれるのだろう。

『恥辱』（柳沢由実子訳 小学館文庫）には、日本でいうところの地域生活支援のようなサービスを受ける女性が登場する。

体重が増えるにつれて、まわりの人々の態度が変わっていくのは、まったく不思議なことだった。まるで、太っている人間は細い人間よりも少し知能が劣るというのが、一致した意見であるかのように。彼女はヘルパーたちに勝手にそうふるまわせておいた。そして、彼女たちの一方的な思い込みを、自分にとって有利になるように利用した。自分の思うままに彼女たちを動かすにはどうしたらいいか、よく知っていた。**彼女は太っているんだから！ 肥満のために障害者になったんだから！ こんな態度を取るのもしかたがないのよ。彼女の責任じゃないわ。理解できないんだから。**マイブリットのそばにいるとき、ヘルパーたちがどう思っているかは一目瞭然だった。

登場する二人の主人公の一人マイブリット・ペッテションは、『喪失』のシビラと比べるとはるかにしたたかだ。太りすぎたために福祉サービスを受けているのだが、その生活に納得しているわけではない。まるで敵であるかのようにヘルパーに接しながら、同時に「彼女たちの一方的な思い込みを、自分にとって有利になるように利用」する。自身の障害を武器にして優位に立とうという言動は、現場の支援者には耐えがたいことだろう。しかし、それがユーモラスにも感じられる。

マイブリットはホームヘルパー・センターでどんなおしゃべりが繰り広げられているか、想像がついた。彼女がどんなに“消費者”として嫌われているか。そうなのだ。患者でも顧客でもなく、自分たちは消費者と呼ばれているのだ。ホームヘルプの消費者。自分ではできないことを小さい人たちに世話をしてもらうサービスの消費者。

なにを言われたってかまいやしない。マイブリットは、ホームヘルパー・センターのヘルパーがだれも行きたがらないデブの怪物の役割を、けっこう喜んで果たしていた。

一方でヘルパー側はマイブリットを消費者と呼ぶが、これは侮蔑の呼称ではないのだろう。スウェーデンの生活支援の制度の中では、一般的にそう位置づけられているようだ。特に民間の福祉事業が参入してから、福祉利用者は消費者として確立したと思われる。

マイブリットの幼なじみで今は刑務所に収監されているヴァンニャ・ティレーンに、マイブリットのヘルパー、エリノールが手紙を送った。マイブリットのことが心配だったのだ。そしてヴァンニャから返事がきた。

「エリノール様、手紙、ありがとう。あなたのように他人の問題に親身になって取り組んでくれる人がいると知って、わたしは本当にうれしいです。未来に希望を感じます。消費者（なんて変な言葉！ いままで聞いたこともないわ。もっともこの塀の中にはホームヘルパーのサービスを受ける人はいないわけだけど……）の家の浴室に閉じこめられたら、たいいてい人はきっと、もう関係ないという態度を取って、いやな記憶を葬り、二度とそこへは行かないでしょう。

ヴァンニャはサービス受給者が「消費者」と呼ばれていることを知らなかった。『恥辱』を読み込むと、ヴァンニャは16年半収監されているらしい。そして作品上の西暦は1章目の記述から推測できる。もう一人の主人公モニカ・ルンドヴァルが兄の墓を訪れている場面。亡き兄の墓石には1982年没と書かれていて、それは23年前だという。つまり作品の現在は2005年。ここからヴァンニャが刑務所に入っている16年半を引くと、およそ1988年になる。スウェーデンのバブルがそろそろお終わろうとしている時期だ。その頃のヴァンニャが「消費者」という呼び方を知らないのは当然だろう。スウェーデンに新自由主義が台頭してきた時代を、彼女は塀の中で過ごしていたのだから。わざわざ「消費者（なんて変な言葉！ いままで聞いたこともないわ）」と書かせ、収監を16年半に設定したのは作者カーリン・アルヴテーゲンが、社会福祉の変容を強調したかったからなのではないだろうか。

さて最後になったが、カーリン・アルヴテーゲン自身に触れずに終わることはできないだろう。『喪失』の「訳者あとがき」から引用する。

映画の小道具係として十二年間働いてきたカーリン・アルヴテーゲンが、作家になったきっかけについて、彼女はこう話している。

「いままであまりこのことは公に話したことはなかったけれど、アストリッド叔母さんの影響が大きいということは、言えます。『長靴下のピッピ』の作者アストリッド・リンドグレンは母方の祖父の妹、わたしの大叔母に当たるの。

私は作品を読み終えて「訳者あとがき」に目を通すまでこの事実を知らなかった。そして何かスーッとした気持ちになった。シビラの自由を愛し求める姿が、自由奔放なピッピの姿と重なって感じられたのは私だけだろうか。

(次回に続く)

カーリン・アルヴテーゲンのミステリー小説

『罪』 柳沢由実子訳 小学館文庫

『喪失』 柳沢由実子訳 小学館文庫

『裏切り』 柳沢由実子訳 小学館文庫

『恥辱』 柳沢由実子訳 小学館文庫

『影』 柳沢由実子訳 小学館文庫

『満開の栗の木』 柳沢由実子訳 小学館文庫

『バタフライ・エフェクト』 ヘレンハルメ美穂訳 小学館文庫

※2024年1月現在、筆者が確認した文庫版で入手可能な日本語訳を紹介している。